

---

# つまらない旅行殺人事件

上村華月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

つまらない旅行殺人事件

### 【Nコード】

N1823Z

### 【作者名】

上村華月

### 【あらすじ】

旅行代理店勤務の嘉子は、ある日「つまらない旅行」プランを提案させられることに。苦労して山に登ったら頂上に民家があるなど、独特のセンスを披露する。

そのつまらない旅行中にクライアントの上司が殺害されてしまう。犯人は誰だ？嘉子が突き止めた隠された真実とは？

## プロローグ（前書き）

旅行代理店勤務の嘉子は、ある日「つまらない旅行」プランを提案させられることに。苦労して山に登ったら頂上に民家があるなど、独特のセンスを披露する。

そのつまらない旅行中にクライアントの上司が殺害されてしまう。犯人は誰だ？嘉子が突き止めた隠された真実とは？

## プロローグ

佐野嘉子さのよしこは旅行代理店窓口勤務。今年28歳。独身。彼氏なし。仕事に就いて8年。彼女はお客様に少しでも要望に沿った良い旅行の提案をすることにやりがいを感じている。モットーは誠実である。

以前一組の老夫婦に介護センター下見ツアーを提案し、好評を得た。それが旅行会社の重点商品となり先日社長賞をもらったばかりだ。但し好評が得られたのは会社の一部の上層部からのみではある。介護センターから高額バックマージンを得ることが出来るからとのことだ。

嘉子は今日も何事もなく淡々と業務をこなす。

「南国リゾートでしたら、当社でちょうどハワイキャンペーンをやっております・・・」

大学生らしきカップルに対しても嘉子は、丁寧にプランの提案を行う。少しでも要望に沿える旅行をと、パンフレットを覗き込む。その度に前に垂れてくる肩まである長いうすい茶色の髪を時折耳に掻き上げる。パンフレットをめくる手つきも慣れたものだ。

「カップルの方に人気のこちらのホテルはいかがですか？」嘉子は尋ねた。

「もう少しショッピングセンターに近いホテルがいいな」と彼女。

「俺は海でパラセイリングがしたいかも」と彼氏。

「私はイルカが見たい」

大抵の客は、カウンターの前では気持ちが大きくなり、次から次へと新しいチャレンジブルな要望を出してくる。

「それでしたら、ベンチホテルをシーサイドに置いた方がアクティビティへのアクセスが良いかもしれませんね。夕食はサンセットに浮かぶダイヤモンドヘッドを眺めながらシャンパンでフレンチなどが良いかもしれませんね」

嘉子は最高の旅行を楽しんでいただくこと、積極的に当店の接客マニユアル通りに横文字を並べ提案をする。日本人は横文字を聞くだけでロマンチックな幻想を描きやすく、実際以上に素敵旅先に見せることが出来るため有効とのことだ。

そしてプランもまとめ、嘉子は日程などを目の前のパソコンに入力する。

「プランが出来ました。お見積りですが、いただいているご予算よりも7万円程高くなってしまっておりますが、お支払いは現金でよろしかったでしょうか？」客の要望を全て満たすと、いつもこうだったことになる。但し嘉子は慣れている。

嘉子の左右に若干離れた二重の目は、カップルに鋭く向けられる。そして右手でおもむろに制服の胸に刺さっているペンをとり、申込書類の作成を始める。やや強引に見えるこの手法も接客マニユアルの実践だ。客が迷うであろうポイントは素通りし、自然を装い強行に一つ話を前に進めるといふもの。

また嘉子としても、旅行というのはなかなか行けるものではないし、行くなら100%満足すべきだ考えている。ましてやたかが何万円の予算オーバー分をケチること、旅の満足度が80%や70%になっても仕方ないなどという考え方自体は全く理解出来ないものだった。

「……あのっ……ちょっともう一度プランを説明していただきたいんですけど……」

彼氏はためらった。そもその予算は本当に自分が出せる最高金額で組んであり、それを越えると自らの食費などの生活費を削る以外方法が無かったからである。但し彼女には少しでもいい旅行をプレゼントしたい……。

彼女の方は嘉子の提案したプランにハマっている上、既に決定との意識がある。よってプランはどうしても譲れない。「オーバーした分は私が出そうか？」と言った。こう言えば彼氏が支払ってくれることを良く知っているしたたかな期待もあった。

というわけで7万円の過剰な支払いについて、結局彼氏はすんなり受け入れる以外なかった。

「ううん、いいって、俺が出すよ。折角ハワイまで行くんだしね」

彼氏は右手で彼女を抑えるように、任せとけといった動きをした。

「そうだね、思いつきり楽しもうね、ヒロ君大好き」

二人の会話はまとまったようだ。

ただヒロ君の頭は、明日からどうやって生活費を削って7万円を捻えるかに覆われていた。

ちなみに目もうつろになっており、眼球もどこか遠くを見ていた。

嘉子は昼休みに店舗の事務所奥にある、二人も入れれば一杯になってしまふ狭い休憩室で軽い食事を取った。代理店の昼休みはピークタイムを外した少し遅めの時間に設定されている。この日は朝自分で握ってきたおにぎり2つと、コンビニで買ってきたミニサラダを食べた。そして休憩室に置いてある会社の福利の日本茶を飲み、やっ

ぱり美味しくないなと思いつつ、再びカウンターへと戻った。

## 同業者来たる

3

「よし、午後も頑張るぞ」

とはいっても店舗がオフィス街にあるため、昼休み明けのこの時間はほとんど客が来ないものだ。

しばらくしてフラッと嘉子と年頃も近い小柄な女性が一人でやってきた。ショートカットに前へ下ろされた前髪は真っ直ぐに整えられ、黒縁メガネをかけている。すらっとしたモデルのようなスタイルの割りには格好がダサく惜しい。FIGHTと書かれた黄色いTシャツにジーンズを履いていた。

きつと何かのオタクに違いない……。嘉子がそう思っていると、案内板の示すとおり、この女性は嘉子の目の前に腰を落とした。

「いらつしゃいませMGTトラベルへようこそ！」

マニュアル通りの嘉子の明るい声とは対照的に、女性客は大きめのバッグを大切そうにひざの上に抱え、うつむき加減で話し始めた。

「すみません、旅に出たいんですが」

嘉子は女性客のあまりの暗さに戸惑った。まるで傷心一人旅に行くような気配を感じた。

「どのようなご旅行を考えていますか？」

「いやっ、つまらない旅行って何かなって？」

「つまらない旅行と申しますと？」

嘉子が「えーっと」頭で聞きなれない言葉を必死に整理していると、女性客は話し始めた。

「うまく言えないですが、私も旅行代理店の窓口で働いてるんです。



けど、ずっと疑問を感じてるのがあって・・・」

「えっとー、実は今更なんですけど、ずっと営業成績があまり良くなくて。もう8年も働いてるんですけど、こないだ上司から面談で、あなたはどいう旅行がプロデューズしたいの？なんて聞かれたんです。

横文字でプロデューズだなんて、ほんと外国かぶれでしかも彼は何かと鼻につくんです。例えばめがねの縁が赤いとか、Yシャツの袖にカフスをつけてたり。しかも私より若くて大学卒業して結婚して子どもまでいるんです。それでプロデューズだなんて言われたんで、もう実際は面談で言われたことなんてあんまり覚えてないというか、聞く気も起きなかつたんです。

けど家に帰って一つ頭に残ってる言葉があつて。彼に頭に言葉を残されたつてのもシャクで、それだけに忘れたくても忘れらなくて、何を言われたかというところ君のプロデューズした旅行はつまらないものになつてないか？まあ、お前なんかにはつまらない旅行ですからプロデューズ出来ないだろうけどな」なんです。

つまらない旅行なんて仕事中に考えたこともなくて、通勤途中に考えたりしたんですが、それって誰と行くかが大きくて、例えば社員旅行なんかハワイでも行きたくないし、もし行ってもきつと帰つて来てこう思ふんですよ。あーつまらなかつたつて。もう行きたくないなつて。これが・・・」

嘉子は話を頷きながら、笑顔を取り繕いひたすら聞いていたが、愚痴なのか何なのか、長い話が何処に落ちるのかもわからず少し苛立ちを感じた。一つ分かつたのが、この客には接客マニュアルにある、横文字の連呼は通用しないといったところだろうか。

埒も明かないので嘉子は話に割って入ることにした。

「確かに折角のハワイでもそれじゃつまらないですね。あとこう思うんです。すみません話を割ってしまって。つまらない旅行っていえば私は寺周りとかもつまらないって思います。というのも私はお寺とか興味がないので。興味ってつまらなさを決める一つの重要なことかなって」

「えっと、確かに興味は大事かもしれないですね。私も山登りとかあんまり好きじゃないかも」

4

嘉子は少し考え、ふと過去に自分が手配した一つのプランを思い出した。そしてカウンターに少し前のめりになりながら、

「それでしたら山登りに行きましょう。しかもちょうど山登り好きの方から評判のあまり良くない山があるんです」

「評判が良くないってどういうことですか？」

「標高1000メートルの普通の山なんですけど、頂上まで行けないんですよ」

「.....」

女性客は嘉子が何を言っているのか分からなかった。そして場を取り繕うべく少し苦笑いをした。

「頂上に山の持ち主が住んでいるので、登った先に見えるのは一軒の民家なんです。先日お客様から登頂直後に、山の持ち主に怒られたとクレームが入ったんです。家の周りで騒ぐなって」

「……。けどそこに行くまでの道のりとか、景色が良かったり、空気が新鮮だったり……」

「いやいや、それも微妙なんです。なんせ頂上に民家がありますからね。登山道の脇にアスファルトの整備された道があつて、車が通るんです。登山道を苦労して歩いてる脇に車が通るんですよ。やる気なくなりませんか？」

そして嘉子はたたみ掛けるように、過去に受けたクレーム内容を洗いざらい女性客に伝えた。

「景色もイマイチです。なんせ周りがもっと高い山に囲まれていますから。山しか見えないんです。上の方に上つても山、下から望んでも山。結局上から見える景色が下から見えちゃうんです」

「……。では、その山に行くプランをお願いします」

女性客はつまらない旅行がどういうものかを少し分かり始めたようだ。そして、話だけでも最後まで聞いてみようと思ひ、ひとまずOKを出すことにした。

女性客の承認を勝ち取ると、「これは……イける」嘉子は内心そう思った。

要するに過去のクレーム案件をひっぱってくれば良いのだという勝利の方程式を導き出した自分の能力が実感出来て楽しくなってきた。ちょうど学生時代に数学や物理の公式の仕組みを理解し、どんな問題が解け始めるようになったあの感触に似ている。

## 成約となるか

5

「ありがとうございます」

嘉子はカウンター越しに軽く頭を下げた。そして話を続けた。

「ここからだと電車で行くことになりましたが、金曜日の夜出発でよろしいでしょうか？」

「ですが、金曜日は何時に仕事が終わるのが・・・」

嘉子は戸惑う女性客に構うことなくまくし立てた。

「いえ、おススメは絶対この曜日のこの時間帯なんです。というのももおじさんと若い女性が多く乗車されています」

「ひょっとして不倫旅行ってやつですか？奥さんには出張と偽ってってその何というか」

「そう伺っております。また金曜日ですから、出張帰りで車中にてお酒を飲まれる方も多く臭いも・・・二人より添われてその何というか・・・」

「・・・それをお願いします」

女性客はノリノリ状態の嘉子の手前、話はなりゆきに任せることにした。

「宿泊はどうされますか？」嘉子が聞いた。

「おススメはありますか？」

「はい、ございます！」

「山のふもとに温泉宿がございます。ここの温泉はリュウマチや肩こりの効能があるといわれています。朝から晩まで療養のためずっと浸かってらっしゃる方が多いと聞いています」

「旅館は普通なんですね？」

女性客は徐々に話しに乗って来た。

「というか朝から晩までずっと浸かっているんです。ぬるいんですお湯が。」

「はぁ・・・ではとりあえずそこをお願いします」

6

「当日はチェックインをされて、翌日はどうされますか？直接山に行かれますか？それとも・・・」

「他に何かおススメってありますか？」

「はい、近くにトンネルがあります。幽霊が出ると噂の」

「あまり興味がないんですが・・・」

「良かった！」

嘉子は次々に決まる自身の提案に、一種の快感を覚えた。意識はしていないがカウンターの下ではガッツポーズを作られていた。

「ではこちらで決まりですね！幽霊なんて見えませんから、実際見えるのはトンネルだけなんでちょうど良いかと。しかも一般的に幽霊の出にくいとされる昼間ですから尚更良しですね。また落書きが凄くて、内容も卑猥だったり下劣なことが多く、マナーの悪さにも腹が立つてくるかと思えます」

「何も見えないって・・・何かそこに行く意味があるんでしょうか・・・。それでトンネルを見た後は、山ですか？」

女性客この話を聞いたあたりで、いくらなんでもこんな旅行はちょっと無理と思い始めている自分に気がついた。

しかしその瞬間、と同時にひらめいた。

「これは・・・イケる」

まさか赤メガネもここまでつまらない旅行を想像することは出来ていないだろうと思ったからだ。

また上司に指示された通りにつまらない旅行プランが出来ましたと言って、いつそのプランに部下の仕事の確認という名目で行かせられれば、というか彼は断ることが出来ないはず・・・。

しめしめと思いつながら、自分の8年間のキャリアとプライドを傷つけた一種の仕返しが可能と考えた。

7

「はい、トンネルの次ぎはお待ちかねの登山です。山の麓の飲食店はすでに潰れてしまっていますので、お食事と水はこちらの方で旅館にお願いしておきますね」

「その後は下山していただき・・・」

「ちよつと待つてください、その山1000メートルあるんですよね、その・・・日中に戻ってこられるんですか？」

「はい、お車の方はこちらで手配させていただきます」

「下山後は電車に乗って戻ってきたいただく感じになりますが、時間もありますので折角ですからお寺でも見ますか？」

「お寺にはどんな日くが付いてますか・・・？」

女性は期待した。身を乗り出して嘉子の提案に耳を傾けた。

「はい、ですが正確には跡地です。1600年代に徳川家が建立といわれる由緒正しき歴史の有るお寺です。その位置関係は江戸の北西に位置します。当時北西は徳川家にとって好ましくない方角だったとかで、このお寺が幕府を守っていたとされています。徳川家の繁栄の裏にはこのお寺の存在が大きな意を為したとのことですよ」

「けど跡地なんですよ？お寺は何でなくなっちゃったんですか？」

「立ち退きです。バブルの頃この辺にリゾートを建設する計画があったとかで、今はただの草むらです。好きな人はこんな場所でも歴史に想いを馳せることも出来てしまいますがご容赦いただけますよね？それで住職なんですが・・・今は田園調布に住居を構えているようです」

嘉子は満悦に浸る女性客を目の前にしての恍惚がたまらなく快感だった。

「というわけで・・・以上のプランでよろしいでしょうか？1泊2日ですから、お一人で 円になります。それで御社の社員は全部で何名ほど？」

「えっ、会社ですか？」  
女性は目を丸めた。会社ではなく上司一人で行かせる予定だったからだ。

「そうです、さっきお客様もおっしゃってましたよね、誰と行くかが大事だって」

「社内旅行などいかがですか？」

「は、はあ」

そして嘉子は旅行のコースと見積りをぱぱっと印刷し、女性に渡した。そして笑顔でこう締めくくった。

「是非前向きにご検討願います。それではあなたの上司の参加と、当日の悪天候をお祈りいたしております。それとー、お支払い方法は銀行振り込みでよろしかったでしょうか？」

嘉子は旅行代理店の社内旅行を取り付けたことが評価され、またもや今月の社長賞候補に上がっている。ただし、ただ単に嘉子が旅行代理店の社長の娘だからではないかという噂はある。



## 事件発生

8

アジサイの花が様々な色で街の、特に道端を飾る頃。すなわち、毎日朝から晩まで雨が降り、部屋の中が湿気でカビなど生え始め嫌な気持ちになるこの頃、佐野嘉子さのよしこに事件は起こった。

昼過ぎ、いつも通り嘉子が旅行代理店のカウンターに座っていると、後ろから上司に呼ばれた。

「佐野さん、お客さん来てるから今やってる対応終わったら奥に来てくれるかな？」

お客さんって誰だろ？一通りの対応を終え、嘉子は恐る恐る事務所控え室に入った。

「失礼します」

ドアを引くと、間から2人のスーツを着た男性が見えた。

「始めまして、警視庁捜査一課の三田みたと申します。んでこっちが林です」

軽く頭を下げ形式的な挨拶をした。三田は頭髪を七三分けにし、ピシッとしたスーツで決めている。35歳くらいだろうか。そして突然のことに嘉子は全身に力が入っていた。

「いやあお忙しいところすみませんね、それであのちょっとありましてね・・・」

すらっとした短髪の大学生のような男が、あたりを見回している。これが林だ。

三田の話をさえぎる形で「田中慶子さんご存知ですよね？」と嘉子に唐突な質問が投げかけられた。

三田は若手の林に話を持っていかれたからだろうか、イラッとした表情を浮かべている。

「お客さんの田中さんでしょうか？」

嘉子は田中慶子という名前を良く覚えていて。それもそのはず「つまらない旅行」のクライアントだった。

「そうです。実は・・・彼女が手配した旅行先で殺人事件がありましたして」三田が話しの主導権を取り戻した。

「えっ、ということとは・・・」

「そうです、旅行から帰って次の日、つまりは7月4日の朝に、彼女の上司なんですけどね。桜井和人さんが遺体で発見されたんです。」

「正確に言いますと旅行二日目7月3日の朝から姿を消されて、それで今朝遺体となって見つかったというわけなんですよ」

嘉子はシヨックを隠せない。自分が手配した旅行で殺人事件が起きたなんて。

また田中慶子とは旅行の打ち合わせで何度も会っているからか、彼女には他人事とも思えなかった。

「どうですか、何か旅行に行く前の田中さんにおかしいところかありませんでしたかね？」

三田は嘉子の顔をじっと観察するように見つめている。

「おかしいところというか、元気の無い方だなとは感じていました」

「ただ・・・」

情況と気持ちの整理もつかないままではあるが、嘉子はなんとなく

会話をしなければならぬという雰囲気と言葉を發した。

「ただなんですか？」林が突っ込む。

「田中さんが犯人っていうことですか？」

「まだ断定できていません。田中さんが手配された旅行ですから、念のためあなたに聞いているというだけですよ」

そして嘉子は田中慶子との過去のやり取りを一通り刑事に話した。

すると林が三田にこっそり耳打ちを始めた。「仮に犯人が田中慶子だとすると、動機は十分にあつたといえそうですね」

「ああ、桜井の田中慶子に対する日ごろの態度はそう言えるかもしれないな。ましてや被害者の死因は転落死だからな」

「突き落とすだけなら女性の田中でも無理なく殺せますしね、しかし死亡推定時刻はAM10時〜11時の間じゃないですか？田中にはアリバイがあります。彼女は同僚達と一緒にトンネルを見学してたつてことですし」

「確かトンネルにいた頃だよな・・・あつすみませんこちらの話ではつとした。三田は林との会話が嘉子にまる聞こえになっていることに気がついた。

何せ事務所の休憩室は2人入れればいっぱいになる広さだからだ。

9

「あつ、いえいえ」

そういうわけで嘉子は筒抜けになっていた刑事達の話聞いていたわけだが、一種の違和感を覚えた。

というのもただ田中慶子さんがとても人を殺す人物には見えなかったからだ。

確かに上司の桜井には恨みはあったとは思うが、ただ単に仕事上の嫌味を言われただけのことだし、ましてやその仕返しとしての今回の旅行であって、そうなるに既に恨みは晴らされているはずだと考えた。

また彼女が喜子に始めて会った頃は暗い感じに見えたが、何度か会っているうちに少しずつではあるが、性格や態度が明るくなっていくように見えていた。

「佐野さん、他に何か思い出したことがあることありますか？」

三田は嘉子に聞いた。

「あの、田中さんの動機っていうか仕事上のちょっとしたことで・・・、それくらいで人を殺すってのはどうもおかしい気がするんですが」

林が一呼吸置いてから、ポンと片手を嘉子の肩の上に乗せた。

「上司からのヒドい一言とかでも最近では人殺ししたりとかそんなご時勢なんですよ。それに刑事ってのは例え可能性が低いにしても洗いざらい調べるのが仕事なんでね」

「お前新人の癖にわかったような偉そうなこと言うな」

三田は林の態度が気に食わなかったようで、少し声を荒げた。

ただ嘉子は事件のことが不可解で、刑事二人の内輪もめなどに気に留められる状況ではなかった。

「だとしたらその上司って、桜井さんっていう方ですよ、他から恨みをかけていたことはないんでしょうか？私はどうしても田中さ

んがやったとは思えないんですが」

「ちなみに佐野さん、そのなんというか、アリバイは？7月3日午前10時～11時までどちらにいましたか？」三田は嘉子にズカズカと聞いた。

「私のアリバイってことですか？」

嘉子は声が大きくなってしまった。あまりに唐突で思考の整理は当然付いていかない。

「えっ、その昨日ですよ。私は会社にいました。それで、あのっ、みんな知ってます私が会社にいたこと。だから、犯人ではないです」嘉子はかなりの早口になってしまった。不自然な対応をしてしまい犯人に疑われるのではないかという失敗感が彼女を襲った。

「いえ、いいんですそんな別に佐野さんのこと疑っているわけじゃないですから。ただ先ほども言いましたけど、刑事の仕事ってそういうものなんです」

「ほんと因果な商売でしょ？すみませんね」

そう林が言うと、嘉子は少しほっとした。

ただ三田は林のじゃぶりっぷりが気に食わないようで「だからお前が偉そうなこというな」とまたは林の耳元でささやいていた。

二人の刑事は嘉子に軽く会釈をすると、店舗から出て行った。

そして嘉子はとりあえず会社に関することだし、個人的には全く腑には落ちていないが、上司にこの旨を報告することにした。

## 自宅にて

「ただいま」

嘉子は午後9時過ぎにこの日の勤務を終え東京の世田谷にある自宅に戻った。自宅というか実家暮らしをしている。

未婚の嘉子はここで自身が勤める旅行代理店の社長である父と専業主婦の母と3人で暮している。整理された高級住宅地の一等地にあるこの家は2メートルはあるうかという思われる塀に囲まれた、地下1階の3階建てで、父が15年ほど前に購入したものだ。

現金で一括で買ったと豪語しているがために、近所からは成金屋敷と呼ばれている。

嘉子は30平米はあろうかという正に西洋風と言つにふさわしいダイニングで、母の作った夕食を一口二口食べた。今日はいろいろあったし食事という気分には到底なれなかった。

そして自分の部屋のある3階に階段で上っていくと、

「よっちゃん、ちょっと来なさい」

2階にある父の書斎から、嘉子と呼ぶ声が聞こえた。

「何お父さん？」

「こらよっちゃん、部屋に入るときはノックぐらいしなさい」

そう言う割に父は偉そうな机のえらそうなイスに座りふんぞり返っている。嘉子は父のこういうところが好きにはなれないが、あきらめるといふか今更どうでも良いかと思っている。

「今日刑事が会社に来たらしいじゃないか？」

「もう知ってるの？」

「大体は部下から聞いたよ。うちの会社の手配した旅行だからな、悪影響が出るかもしれないだろ」

「お父さん、ちょっとそれなの最初の一言、私警察に疑われたんだよ」

嘉子に溜まっていた何かが涙となって目から溢れ出した。

「私ね、今凄く辛い。分かる？」

「確かに私は短大卒業したはいいけど何処にも就職出来なくて、それでお父さんのコネで今の仕事に就いたんだけど、ちゃんとまじめにやってるつもりだし好きなのこの仕事。今回の旅行だってお客さんの要望に添えるようにプラン作ったの。けどその要望ってのは殺人計画を実行するための要望で、私はそれを提案してたってことなの」

嘉子の怒りは止まらない。

「まだ田中さんが犯人って決まったわけじゃないけど、いずれにしても誰かが私の作ったプランを利用したのは間違えないでしょ？もうほんとうに悔しくて・・・もうお父さん一生私に構わないで」

ボタン。

嘉子は父の書斎のドアを勢いよく閉めると、自分の部屋へと駆け上がっていった。ベッドに思い切り飛び込むと、パジャマに着替える気力もなくそのまま疲れもあって眠りについた。

## 翌日会社で

翌日嘉子はいつも通り10時に出社した。

「佐野さん、お父さんがお呼びだよ」

カウンターに座ろうとした時、上司から声がかかった。

「私行きません。以上」嘉子はむっとしながら反発した。

父といざこざがあった翌日は大抵こうなる。父は会社の権力を使って無理やり私と話しをする場所を作るのだ。嘉子はこのやり方にはつくづくうんざりしている。

「ちよつと佐野さん、頼むよ。もし佐野さんが行ってくれないと今度は俺が上司から呼び出されるって知ってるでしょ？こないだの何だっけか、犬を飼う飼わないのケンカの時だつてさ・・・」

「分かりましたよ」嘉子はそのつと立ち上がり上司の方を向き、そして前に垂れてきた前髪をかき上げ、ちらつと軽くにらみをきかせた。父への苛立ちが増幅するも、上司からはコネ入社の自分ではあるがいつも他の社員と平等に扱ってくれている感謝もあって、しょうがないけど行くことにした。

「そんな目しなくなつていいじゃんか佐野さん、頼むよつてかありがとね」

上司は大人だった。

嘉子はさつき着替えたばかりの制服を私服に着替え終わると、勤め先の店舗から電車で一駅行ったところにある本店に到着した。55階建ての高層オフィスの窓から東京湾が一望できる40階のワ



ンフロアが事務所になっている。

「お疲れ様です」

事務所に入るといたるところからこの声が聞こえてくる。しかも全  
員立ち上がってこちらを注目している。ここで働く人は私のことを  
良く知っている。みんなが愛想の無い笑顔で妙にニコニコしながら  
嘉子を迎える雰囲気も気に食わない。

「全く、みんな上ばかり見てさ、自分の仕事にもっと誇りをもつ  
て欲しいものだわ」

嘉子はブツブツ言いながらも社長室にたどり着いた。

コンコンとノックすると「失礼致します」と言ってお辞儀をし部屋  
に入ってしまった。

嘉子は会社では父と接する時、意識して家族関係を持ち込まないよ  
うにしていた。

部屋に入ると父とその脇で見知らぬ女性が応接セットに腰かけてい  
た。

「おーよっちゃん、来てくれたか」

社長は立ち上がって、嬉しそうに両手を広げ嘉子を迎い入れた。

「社長、失礼ですがその呼び方は止めていただけないでしょうか？」

「何言ってるんだ、よっちゃんはよっちゃんだろ」

「あの、会社ですから佐野と呼んでいただければと思います。さら  
に社長の命令ですから、来るのは当たり前です。それで要件はなん  
でしょうか？」

「よっちゃん、そんな固いこと言わないで欲しいな。お父さんな昨  
日のことを謝りたくてさ……」

「それ位のことと呼び出さないでっていつつも言ってるでしょ！」  
こうなることは分かっていたし、あきらめている部分もあったが、  
さすがに嘉子もキレた。

「もう何なの？私忙しいの、分かるでしょ？私がお店から抜けたか  
ら、他のみんなに迷惑かけてるの！」

「まあいいじゃないか、大事な話があるんだ。といつても昨日お父  
さん反省したんだ。よっちゃんがどれだけつらかったかかってことを  
な。それなのに会社の利益を守るためにあんなこといつてごめんな」  
社長は嘉子に軽く頭を下げた。

「ちよつと、やっぱりその話ですか？もういいよ、そんなことお父  
さんはお父さんでそういうお父さんだつて分かっているから」

「いやっ、違う違うんだ。それでよっちゃんの気持ちを少しでも早  
く和らげたいって思ってたな。この方は探偵の細谷さんだ」

細谷は腰掛けていたソファから立ち上がり、丁寧なお辞儀をした。

「だから何なんですか？私は別に社長に解決して欲しいとかそうい  
う風にも考えないですし、私の気持ちを汲んで同情して欲しいなん  
て尚更思っていませんけど」

「よっちゃん、これは昨日の夜お母さんと話し合って決めたことな  
んだ」

社長はゆっくりと窓際に歩いて行く。窓の外を眺めながら「これか  
ら話すことはな、とても大切なことだから良く聞きなさい」

「実はな、家にこんなものが届いていたんだ」

社長はスーツの胸ポケットから封筒を取り出した。

「読んでみなさい」

喜子はささくさと社長の方に歩き、封筒を右手でふんだくって、中を開いた。パソコンで打たれた手紙が三折りになって入ってた。

「MGTトラベル社長様 明日御社の手配した足許山旅行中あしきよやまに悲劇が起こります。免れたければ全て中止とすべし。7月1日 田中慶子」

「何これ」

嘉子は足許山と日付を見て、これが自分の提案したあの「つまらない旅行」だとすぐに分かった。

そして愕然とした。「なんでこんな大事なことを今まで言ってくれなかったの？てか警察にはちゃんと届けたの？」

「こういうことは今までにもたまにあつてな。旅行に行きたくない人とかライバル社からの嫌がらせだったりとな。今までは警察に届けていたんだが、調査の結果はいつもこういった類の連中からのものでな。今回は何もしなかったんだ」

「ちよつと・・・」

嘉子は手紙の差出人のところまで目が止まった。そして父のやり方にも凄まじい憤りを感じた。

「しかも田中慶子さんって私のお客さんじゃないの、何で今まで黙ってたの？」

「黙っていて悪かったかと思っっているよ。ただ事前に話したらよっち

やんが心配するだけと思つてな。何も起きないもんだろ、普通さ」

「警察にも今更話せないだろ。会社は事前にこういった情報を得ていたにもかかわらず何も対策を取らなかつたって報道されたらそれこそ一大事だ。従業員は派遣社員を含めて千人だぞ。全員路頭に迷つたら大変だと思わないか？」

「大変だと思わないかつて言われても、大変に決まってるじゃないですか。ていうか今からでも警察に言うべきだと私は思いますけど。隠蔽していたことが発覚した場合の影響の方が大きいですから」

「まあ、そういうなつて。この手紙は受け取っていないとすると決めたんだ。そう、お母さんとな」

嘉子は母の名前を出せば自分が納得すると思つている父が嫌いだった。

「ああそうですか。分かりました。一社員の私が社長に提言をしてすみませんでした」

「まあ、そんな怒るなよ、よっちゃん。それでこの細谷さんに来てもらったというわけだ。それでは佐野社員協力してくれるかな？もう君の上司には話を通してある」

「協力とはどういったことでしょうか？」

嘉子の顔は引きつっている。

「つまりだな、警察の通常の捜査と細谷さんの独自の調査を行うことで、事件の早期解決を目指すプロジェクトということだ。早期解決すればそれだけ余計なところに捜査も及ばなくてすむだろう。よつて佐野社員は今日付けでカウンター業務を外れて、秘書室付けとなる。」

「そんなの勝手に決めないでよ。何考えてるのお父さん？」

社長は気持ち悪いほど大きな机の革張りのイスに座った。そしてしばらく沈黙をした後、

「よっちゃんのお客さんだった田中慶子さんは何らかの事件に巻き込まれているんだよ。本人がこんな手紙出すわけないじゃないか？これは誰が見たって濡れ衣なんだよ。しかもちゃんとしたアリバイだってあるわけだろ。彼女は今暗い警察の取調室の中で、どんな気持ちでいると思う？」

「それは・・・」

「警察だって暇じゃないんだ。昔お父さんが脱税容疑で捕まったことあるだろ。結局すぐ身の潔白を明らかにして釈放されたけどさ。警察は犯人を捕まえるのが仕事であって、本当の犯人なんて彼らからしたら結構どうでもいいことなんだ。お父さんは今でもそう思ってるんだ。その時はよっちゃんにも迷惑かけたよな。今回この怪しい手紙を警察にも渡さなかったっていうのもあるんだ」

「私だってお父さん信じてるよ。嫌なところいっぱいあるけど、だって私のお父さんだから」

「じゃあ今回の田中さんの件も分かってくれたかな？よっちゃんの大切なお客さんと会社のためにな、よっちゃんもつらいとは思うけど協力してくれないか？」

「うん・・・いいけど。いやっ、分かりました」

「この旅行プランはよっちゃんが考えたものなんだろ。だったら一

番情況が良く分かつてるはずだし、それと細谷さんは若いからこそ見えてやり手なんだぞ」

ロングの髪に紺色の膝丈スカートが似合うきれいなお姉さんがニコリと嘉子の方を見た。

「嘉子さん、よろしくお願いします」

細谷は深々とお辞儀をした。

## 現場検証の旅へ

13

その夜嘉子と細谷は、早速旅行プランに実際に乗って旅をすることにした。現場検証といったところだ。

東京駅から新幹線に乗り込んで長野まで行く。

今日はちよつど金曜日。

「金曜日ですから、車中でお酒を飲まれる方も多く臭いも・・・」  
嘉子が田中慶子に提案したまさにその通りの状況が目の前にあった。となりには中年男性と若いホステスのようなカップルが腕を組んで寄り添っている。

「これはちよつとキツイですね」

細谷は口を開いた。

「ええ、つまらない旅行というか最悪ですね」  
隣合う二人は顔を合わせ軽く苦笑いをした。実際これほどつらいものとは思わなかった。アルコールの臭いにまぎれて時折、いかさきかいかくんの臭いも鼻下へ漂って来るのが誤算だった。

「それで早速なんですけど、私どもの把握している情報なんですけど知っておいてもらった方が、というかいろいろご意見いただけたらと思って」

「どんな情報ですか？」

「被害者の桜井和人なんですけど、結構遊んでいたみたいなんです」  
「社内の子に結構手を出しているようで、ほら桜井和人って結構顔がかっこいいじゃないですか、それでかわいい子には優しかったみ

「たいなんですよ」

「桜井さんって確かご結婚されてましたよね？」

「要するに浮気ってことになるんです。その時当社はまだ案件を承っておりませんでしたので写真などの証拠はありませんが、吉田真理子という同じ職場の方と頻繁に会っているという情報があります」

「そしたら吉田さん怪しいじゃないですか？桜井さんが奥さんとなかなか離婚してくれないからみたいなのって考えられないんですか？」

「吉田真理子もアリバイがあります。なんせ一緒に社内旅行に言ってきましたから」

「そうなる動機から言って田中さんより怪しくないですか？吉田さんの人間関係はどうなんですか？」

「そこは今あたっているところです。共謀者や吉田真理子に好意を寄せている男性などが中心ですが」

「そしたらこの情報を警察に言えば、田中さんを釈放してあげるこ  
とって出来ますか？」

「それは、分かりません。ただこの程度の情報は警察もすでに把握していると思います。ですが、お客様からの要望とあらば念のためタレこみさせていただきます」

細谷は携帯を取り出しなにやらショートメールを送信した。

「はい、タレこみ完了いたしました。田中さんが釈放されればいい  
のですね。それともう一件」

「今度は何です？てかメールって警察に直接送ったんですか？」

「メールの宛先はすみません、機密事項なのでお伝えすることは出



来ません。それで桜井和人には1億円の保険金がかけていました。受取人は彼の妻である桜井幸子となっています」

「保険の加入時期は3ヶ月前の4月です。よって桜井幸子が加害者である可能性も出てきます。」

「けど奥さんが旦那さんを殺すなんて・・・ご結婚されてお子さんもいたんですよね？」

「実は桜井幸子は浮気をしていたという情報があります。息子の幼稚園の先生である角田元です」

「なんかもの凄くややこしくなってきましたが」

「大丈夫です。弊社としては既に犯人の目星がついていますから。そうやって細谷はパソコンを開いて何やらのデータの確認を始めた。そして嘉子は細谷から聞いた情報を頭の中でもう一度整理することにした。」

## 旅館にて

14

旅館に到着したのは午後8時前だった。

新幹線を長野駅で降り、駅前のターミナルで旅館からの迎えのマイクロバスに乗り込んだ。長野駅前は県庁所在地だからか、ホテルやオフィスビルなど東京と遜色が無いほど栄えていた。

細谷は車が走り出すとすぐに旅館の半被はつびを着た運転手に質問をした。

「7月2日に事件があったって聞いたんですが？」

「東京から来たあの旅行者のことですか？」

初老の男性は少しうっとおしそくに答えた。

「そうです、何か変わったことってありませんでしたか？」

「変わったことってどうか、あの人たちはあんまりいい印象は受けなかったな」

「何かお気に障るようなことがあったんでしょうか？」

「いやーってどうかお客さん、あの人たちの知り合いかなんかなのかい？」

「実は同じ会社で働いている者です。今日はなくなつた桜井さんにお花をつけて思いました」

「そうかあ、気の毒にな。ただあの人たちはバスの中でもうそりゃひどいことずつと行っててな。だから良く覚えてるんだけどさ」

「えっ？」細谷は前のめりに運転席の方へ身を傾けた。

「なんでもよ、来るときの新幹線が最悪だとか、うちの旅館のお湯がぬるいんだなんて、もう節操も無く騒いでて、さすがに俺もイラッとしたっつーか」

「イラストとしてどうされたんですか？」

「そんならうちに泊まなくていいって言っちゃまったんだよ。けどそしたら旅館の対応も最悪だなんて、逆にもっと盛り上がったちゃってさ。人をバカにするのも程ほどになってほんと今の若い人たちってばよ」

「そうでしたか。すみませんうちの社員がご迷惑をお掛けして」

「いやいいんだよ。あんたが悪いとかじゃないからさ。きっと政治とか教育問題とかいろいろあんだらうよ東京にはさ」マイクロバスは街灯のない山道へと入っていった。

「それで他に気になることはありませんでしたか？」

「気になることっていったら、あれだな。メガネかけた女の人がいじめられてるように見えたかな。なんでもこの旅行を計画したのが彼女みたいで、それで歌を歌えとか下手な方がいいとかさ」

「そうでしたか・・・」細谷はバッグから田中慶子の写真を取り出して運転手に見せた。

「そうそうこんな感じだったかな、旅館に着いたよ」

一行は旅館に到着した。駅からは車で15分位だろうか。なんてことない一軒家にも似た2階建ての旅館だった。というか民宿と言ったほうが良いかも知れない。「ホテルマウンテン」とカタカナで木版の表札に書かれているのが残念でならない。

嘉子と細谷二人はフロントでチェックインを済ますと、そのまま部屋には行かず食堂で夕食をとることにした。

「田中さんいじめられてたみたいですね？」嘉子はクリームシチューをすすりながら向かいに座る細谷に視線を向けた。

「そのようですね。弊社の事前調査では勤務時間中のいじめとかは無かったとの判断ですが」

「けど、ひどくないですか？旅館の人の前で旅館をけなすようなこ

と言ったりとか」

嘉子は話すと同時にイライラも増していくのが分かった。

「一ついえるのは嘉子さんは責任を感じなくて良いということですよ。この旅行がつまらないとしてもそれはお客さんからの要望であるだけですし、旅館の人に迷惑をかけたというのは会社の民度の問題だと思えますから」

細谷は淡々とシチューをスプーンですくい続けた。うつむき加減で渋い顔をしているのは、これがあまり美味しくないためと推測できる。

嘉子は細谷の正論というか理想的な回答に何も返すことが出来なくなってしまう。そして細谷は男性のような思考回路を持つことを悟った。「もう少し話に乗ってくればいいのに・・・」などと考えながら引き続きもくもくとシチューを食べた。

しばらくして嘉子がデザートのスイカを食べているとき、細谷が口を開いた

「この時間は食堂で宴会でしたよね？」

「そうですね、セクハラが蔓延してほとんどの会社で中止になっている昔の社員旅行のようなコテコテの宴会をご希望されていました」

「ちよつと聞いてみましようか？」

細谷は近くにいたウエイトレスと思われる50台の女性の方へ小走りに歩み寄り、当日の話を聞き始めた。

「そうですね・・・」

5分ほどだろうが、細谷は戻ってくるなり、話の内容を嘉子に話し始めた。

「どうやらその日のメニューは、カレーライスだったようです」

「カレーですか？そんなはずは、私はお刺身と鍋を手配しましたけど」

嘉子は戸惑った。

「それが、当日の朝にお客さんから直接連絡があったとこのことで。急な変更だったから良く覚えているとのことでした。それとお酒は日本酒の熱燗だったようです」

「カレーに熱燗ですか？それってどうかん考えても組み合わせが悪いというか・・・」

「つまらない旅行の延長でしょうか？詳しいことは分からなかったのですが、10時頃女性の方からオーダー変更の連絡があったそうです」

「それで宴会の様子とかがつて？」 嘉子は田中慶子が宴会でいじめられていなかったかが気になった。

「宴会というか8時に皆さん一斉に集合されカレーライスを食べた後、ほとんどお酒には手をつけず、バラバラに席を立たれていったようです。それと宴会の雰囲気は良く覚えていないそうです。なので田中慶子さん含め誰が主席したのかはちょっと分かりませんが、その後もバラバラに行動されたようです。温泉に入る方もいれば、町の方へ出かけられた方もいたそうです」

「誰が電話でカレーライスに変更したんですかね？普通は旅行会社にそういった変更は言うものなんですけど・・・」

細谷は携帯電話を開いて、何かを確認し始めた。

「どうやら田中さんの会社からオーダー変更の電話がかけられているようです。その日田中さんは10時に出社してますから、彼女が自らメニューの調整をした可能性もあります」

食事を終えると嘉子は大浴場へ向かった。

「はあーほんと今日は1日いろいろなことがあったな」  
湯船に浸かりながら今日の事を振り返った。

気になる点がいくつかあった。まずは旅行中に田中慶子がいじめられていたこと。何度か嘉子の元へ田中慶子は尋ねてきたが、その度に彼女は確かに徐々にではあるが明るくなっていった。推測だが、今回の旅行のプランが社内でも受け入れられ、期待されたからなのではないのか？

そしてもう一つは夕食がなぜカレーに変更されたのかだ。コテコテの宴会の方がカレーライスよりも嫌がる社員は多いだろうに・・・。

「・・・ヘクシヨン」

夏ではあるが嘉子は寒くなって来たので、考えても埒の明かない問題は諦めて、急いで湯船から出ることにした。この温泉は何といってもお湯がぬるいことで有名なのだから。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1823z/>

---

つまらない旅行殺人事件

2011年12月29日13時48分発行